

北海道に棲息するスジコガネ属9種は、形態が互に酷似しているが、卵及び幼虫の形態を検討し、且つ成虫の体軀を測定してこの値から各種相互間の相関係数を求める事により、9種を4群に分つ事並びに各群間の類縁関係を推察する事が出来た。成虫体軀の測定部位は次の如くである。頭部：中軸上の長さ、最広部の幅、頭楯基部の幅。胸背板：中軸上の長さ、最広部の幅、先端の幅。稜状部：中軸上の長さ、幅。翅鞘：長さ、前胸基部より最広部に至る長さ、最広部の幅。腹部：前胸基部より腹部末端に至る長さ。上記12部位の測定値を用い、9種相互間の相関係数の係列を図示すると明かに次の4群に分つ事が出来る。A群……Anomala testaceipes, A. costata; B群……A. holosericea; C群……A. daimiana, A. lucens, A. multistriata; D群……A. geniculata, A. rufocuprea, A. cuprea。上記4群の形態を比較するに、胸背板に対する頭部の大きさはA・B・C3群が稍同一で大きく、D群は比較的小さい。稜状部はA・B・C・Dの順で細長くなる。翅鞘はA群が著しく下脹れで、虫体はB・C・Dの順で楕円形に近づく。又この順序のは翅鞘縦隆線の鮮明度とも良く一致し、A群では会合線と共に5本、B群では会合線及び第1縦隆線が顯著であり、C群及びD群の1部は位置は明かであるが隆起は個体により僅かに認め得るものと然らざるものがある。D群の大部分では位置もやや不明瞭で隆起は認められない。卵に於ては卵殻表面の突起はA・B両群は円錐形でC・D両群は円柱形或は棍棒状である。幼虫に於ては尾節腹面の剛毛列はA群は棘毛長くして左右相交はり、且つ棘毛の配列距離は兩列の間隔の2倍より短い。B群は不明、C群は棘毛稍短かくして左右相交はる事が少く、且つ配列距離は兩列の間隔の2倍より稍長い。D群は棘毛の前方に短棘の長い列を有する。上記の如く、各群間の相違は卵・幼虫・成虫各期にわたり共通に認めることが出来る。然してこの4群は、C・Dはごく近縁の種であり、A・BはそれぞれC・Dとは稍異つている様に考えられる。

(文部省科学研究費による研究の1部)

本州産及び北海道産オオニジウヤホシ
テントウの比較

牧 高 治

Takadi MAKI: Comparative studies on "Ōnijiuyahoshi" lady beetles (*Epilachna vigintioctomaculata* Mots.) of Honshu and Hokkaido in Japan.

本州産及び北海道産オオニジウヤホシテントウは分類学的には全く同一に取扱われている。然し両者を比較して見ると種々の点で異つている。即ち翅鞘の地色は同一に飼育しても北海道産の方が赤味が少い、その斑紋は変異が著しいにもかかわらず両者異つた傾向が見られる。又体の大きさは概して北海道産の方が大形である。更に形態的に明な区別点は翅鞘と大腿の形状である。体を正位に置き虫体全部が丁度視野の中に入る位の拡大度の双眼顕微鏡で体の中心上部から見ると北海道産は体の稍後部に於て翅鞘が緩に膨れ出しているのので体の後方も比較的幅が広く見え、この膨れ出しの為に翅鞘の側縁後部の一部が完全には見えない。之に反し本州産はそのように膨れ出しがないので体が後方になるにつれて次第に狭く見え、又翅鞘側縁は完全に見える。翅鞘側縁の下方への彎曲度も北海道産の方が著しい。翅鞘裏面先端の光沢部は北海道産の方が大きい(北海道産コブオオニジウヤホシテントウはこの部に皺がある)。大腿は両地産ともに先の方に4本ずつの主歯がある。この中先端の2本は比較的接近して上下に重ついていて、その下部にあるものは主歯の中最も強大である。之等はDieke 1947の頂歯の上部及び中部に当り、他の2本は彼の側歯に当る。主歯に続いて小さい歯が一行に鋸歯状に並ぶ。本州産の主歯は比較的長く何れも先が尖鋭で各各に二三の尖つた小歯をもつ。北海道産の主歯は比較的短く鈍尖で小歯も発達していない。殊に先端の最も強大な主歯(Diekeの頂歯の中部に当る)は先が直角又は稍斜の截断状でその二三の小隆起(小歯に当る)があるに過ぎない(北海道産コブオオニジウヤホシテントウの大腿は北海道産オオニジウヤホシテントウのそれに形状は似るが各主歯に小歯が発達しているのので本州産及び北海道産オオニジウヤホシテントウの大腿の中間型ということが出来る)。幼虫の高温に対する抵抗

力にも差があるように思われる。又今夏少数の観察ではあつたが両地産を交配の結果孵化したものには畸形が多く成虫になつたものも羽化後間もなく死んでしまつた。交配の結果はいつも畸形が多いのか、又受精し成長した成虫が生殖力があるのか等も確める必要がある、又細胞学的比較も必要であらう。それらの研究が進めば両者の血縁の程度も次第に判つてくると思う。

金沢地方の蠅類について (予報)

堀 克重

Katsushige HORI: On some flies from Kanazawa (Preliminary report).

北陸地方の蠅類については従来何も知られていないので、筆者が昭和 26 年金沢附近で採集した結果を要約して、ここに報告する。

1. ここに報告した種類は、種名の判明した 7 科 49 種と未知種 13 種、合計 62 種である。2. 金沢市に近い大野町及び粟崎を中心とした海岸地帯に沿つて、一種のメマトイが饒産する。また白山の麓の市瀬附近でも、メマトイの習性を有する他の一種が採集された。この 2 種は共に本邦未記録の種類と思われるので、その概略について述べた。3. 金蠅類は 8 種採集された。ここでは *L. papuensis* と *L. porphyrina* の 2 種について、その雄性交尾器の形態を比較した。両種は外形的には酷似するけれども、交接茎で明瞭に識別される。4. 帯金蠅類としては *Ch. pinguis* の一種を饒産する。本種の雌性交尾器を本邦産の *Ch. megacephala* のそれと比較した。両種は尾板と交接茎の形態においても明瞭な特徴が認められた。5. 既知肉蠅類は 19 種採集された。このうち *S. brevicornis*, *S. erecta*, *S. scoparia* の 3 種については、雌雄の交尾器の形態を比較した。また *S. tuberosa*, *S. harpax*, *S. polystylata*, *S. schützei*, *S. josephi*, *S. antilope* の 6 種については、それぞれ雌性交尾器の形態を比較検討した。なお上記 9 種のうち、*S. antilope* は本邦未記録である。また *S. scoparia* は既に SÉGUY (1941) によつて本邦に分布することが認められている。6. 肉蠅類のうち上記 10 種の外に、なお未知の若干の種類が採集されている。ここではその中の 10 種につ

いて、種の特徴として顕著な雄性交尾器の形態について比較して述べた。

なお本稿の内容については、何れも別に詳報の予定である。

上咽頭の構造による日本産コガネムシ類幼虫の分類

沢田 玄正

Hiromasa SAWADA: Notes on the classification of the Japanese pleurostict lamellicorn larvae, based on the structure of epipharynx.

コガネムシ類の幼虫の分類については、従来多数の人々によつて研究されて来たし、又最近ではアメリカの P. O. Ritcher によつて 1940 年以後数次に亘つて有意義な研究が発表せられている。上咽頭 epipharynx の構造については Schiödt (1874), Böving (1921), Ritterschäus (1927) 等によつて着目され、Hayes (1928, 1929) は Lamellicornia 全部に亘つて比較しその属をそれぞれ区別している。Ritcher もその分類にあつて上咽頭を重要視し詳細に調べている。私は日本産のコガネムシ類の幼虫を材料として調べた所、亜科や族は勿論であるが属や種に至つてもかなりの程度まで識別出来ることを知つたし、又自然に近い類縁関係を推測する上に一つの大きなポイントとなり得ると考えられる。各亜科について大要のみ述べれば次の如くである。

1) Valginae—*Nipponovalgus angusticollis* (Waterhouse) を調べたが、*haptomerum* 及び *haptolachus* は全く発達せず、*nesia* を欠き、*tormae* は左右共コマ状で、他の何れの亜科のものとも全く異つて居る。2) Trichiinae—*Paratrichius dōnitzi* (Harold) 及び *Trichius succinctus* (Pallas) について調べた。Cetoniinae のものと似ているが *clithra* の存在しない点が大きな相違である。3) Cetoniinae—*Rhomborrhina* の *R. japonica* Hope, *R. polita* Waterhouse では *haptomerum* に Trichiinae にみられるようなキチン化した歯状瘤起を有するが、Cetoniini に属する *Cetonia roelofsi* Harold, *Oxycetonia jucunda* (Faldermann), *Protaetia*